

鹿児島方言の短い長母音¹

Phonologically Long Vowels in Kagoshima Japanese

児玉 望

KODAMA Nozomi

2017年2月18・19日に国立国語研究所で開催された『対照言語学』プロジェクト第1回合同研究発表会」で、窪菌晴夫氏による発表「鹿児島方言の「の」の縮約と音節構造」を聴講した。発表自体は、日本語における3モーラ音節を忌避する傾向を鹿児島方言を例に論じたものであるが、その後の質疑も含め、整理が必要であると感じたのは、「拍の等時性」が成り立たない鹿児島方言では、1~3モーラの音節を構成する単位としての「モーラ」と、等時的な音量単位としての「拍」は区別されるべきである、ということである。3モーラ音節が短く発音される、ということは、3モーラが2モーラになる、ということとは同一視できない。母語話者としての直感は、鹿児島方言では（本来）、2モーラ開音節の主音である長母音は、必ずしも長くなく、多音節語語末(例:ショーチュー)の場合のように、ほとんど短母音と同じ長さまで短縮することがありうるが、同じ位置の短母音のように脱落することはない。同じように、3モーラ閉音節の主音である長母音も、短く発音されたからといって2モーラ閉音節と同一視はできないと考える。

質疑で話題になった人名、「リンカーン」(A型)を例にとる。この語は、単独で発音された場合は通常、(1)のような音形であり、確かに、筆者の内省でも「カーン」は短い。

(1) [リン]カ(一)ン]]²

また、カーの持続を2拍分にしてピッチ形の異なる音形もあり、こちらが新しいだろう、という点も同意できる。しかし、このように「2拍にする」、というのは、(アクセントを残して)共通語化した鹿児島方言の特徴であり、拍の等時性までもが共通語から借用されているためであると考ええる。

(2) a. リン[カーン]]

b. リン[[カーン]ガ]]

¹ 本研究は JSPS 科研費 (課題番号 15K02484) の助成を受けたものである。

² アクセント表記は”[” (上昇契機)、”]” (下降契機)、”[[” (後続音節上昇調)、”]]” (先行音節下降調)。

c. ?リンカ[ーン]ガ]]

この変種では、(2)cのように、超重音節を1拍+2拍の2音節に分割した発話も不可能ではない。より自然なのは(2)bのような音節全体の上昇調であるが、このような下降に先立つ音節の上昇調は、1モーラや2モーラではイントネーションが被さらない限り起きないので、(2)cの実現形の一つとも解釈できる。

問題は、(1)のピッチ形でも、「カーン」が長い場合がある、ということである。これは特に、イントネーションが被った場合に顕著に現れる。典型的には、A型の下降幅を拡大する場合で、疑問イントネーションにしばしば用いられるが、(3)cのように、平叙文でも現れる。終助詞（平体）の「ヤ」と「ヨ」は、いわゆる「自立する付属語」であり、先行自立語とアクセント単位を構成しない。

- (3) a. [ア]メ]] 「飴」
b. [[ア]メ]]ヤ]] 「飴？」
c. [[ア]メ]]ヨ]] 「飴だよ」

下降幅の拡大は、次末音節末のピッチを高くすることで実現し、この高さがより高く、次末音節の上昇が急になると、より expressive な表現として、驚きや苛立ちを示しうる。

「リンカーン」がこの文脈で現れるときは、「カーン」は(1)と比べて長くなる。

- (4) a. [[リン]カーン]]ヤ]] 「リンカーン？」
b. [[リン]カーン]]ヨ]] 「リンカーンだよ」

(1)との違いは、(1)ではA型の弁別特徴として、末音節の下降が「ある」ことだけを示せばいいので、下降曲線を明瞭に実現するために音節は短いほうが適しているのに対し、(4)では下降が「大きい」ことを示すために、下降の持続を伸ばしている、というようにもみることができる。(4)の文脈ではさらに、ピッチのピークを超重音節の冒頭に置き、単音節A型と同様に、次末音節の高平調を伴わずに音節内でピッチが大きく下降する音形も現れやすい。

- (5) a. リン[カーン]]ヤ]] 「リンカーン？」
b. リン[カーン]]ヨ]] 「リンカーンだよ」

(4)のような母音の長めや(5)のようなアクセント実現は、3モーラ音節に特有の実現形であり、2モーラ音節に終わる「ロンドン」や「スターリン」のようなA型名詞では観察されない。語末の3モーラ音節と2モーラ音節は、環境によって非常に似て見えることはあるが、やはり区別されていると考える。

この点は、ほぼ外来語に限られる語末の3モーラ音節だけでなく、短母音の脱落によっ

そこで、本稿では、公開されている鹿児島方言の談話資料から 2「拍」の音節実現の例を集め、そのような語形がどんな他の実現形をもつかを含めて、これらがもつ 3 モーラ音節との類似点について論じていく。

(9) a. (長)母音助詞の語末母音融合形

b. 子音脱落による融合形 ~r (カー、ナー), m (サー、セー) 等

c. 終助詞ワの融合形

使用した談話音声資料とその方言について簡単に解説する。

資料 A 日本放送協会編『全国談話資料』第 6 巻 九州編 鹿児島市

1954 年の録音。「武家ことば」を収録する目的で、1884～1901 年生まれの 4 名（男女各 2）の話者はいずれも士族出身者が選ばれている。鹿児島方言は本来、用言に敬体と平体の規則的な対立があったとみられるが、敬体が用いられている談話が多い。平体が用いられているのは、「あいさつ」の場面設定談話のうち、夫婦の会話を想定した「送り」と「戻り」の場面での夫の発言だけであり、この場面も妻と比べて夫の発話は短い。

特に鹿児島市方言に特徴的であるのは、「ある」の敬体形である「ゴザス～ゴアス～オアス」が（デを伴わずに）指定助動詞ジャッ「(そう)である」の敬体としても用いられている点である。

(10) ゴアン[サン]チュ]]ハナシ]ゴアン]ガ]] ナ]] p444 「ないという話でございますね」

このため、ジャッ (/ジャロ/ジャッデ/ジャッタ)の規則的な敬体であるジャス(/ジャンソ/ジャンデ/ジャシタ)はほとんど出ない。鹿児島方言の指定助動詞は、自立語として応答・相槌や、また敬体では句末助詞の丁寧形 (cf. 「～ですね」) としての用法もありこれらもすべて置き換えられるため、「ゴザス～ゴアス～オアス」の語形が非常に耳立つことになる。

CDROM 版の音声ファイルはページごとに分割されているので、引用例はページで示す。

資料 B 国立国語研究所方言録音シリーズ 1『鹿児島市方言』

1963 年の録音。1880～1912 年生まれの 6 名（男女各 3）の話者。談話の内容から、「武家」と「町」の両方の出身者を含むとみられる。録音時間の総計は 1 時間足らず。構成は先行する資料 A と似ており、自由会話部分と場面設定により録音者が演じている部分があるが、後者はかなり長いものが多く、平体の発話も夫婦の会話の男性の発話を中心にかなり出る。敬体の語形は、資料 A と異なるものも出るが、ゴアスが指定助動詞敬体としても用いられている点は同じである。ただし、「町」の出身という女性はジャス及びオを接頭したオジャスを併用している。

国立国語研究所ウェブサイト、冊子 pdf、テキストファイル、wav 音声ファイルが公開されている。(http://mmsrv.ninjal.ac.jp/hogenrokuon_siryu/)

談話音声資料は、01-0-0_dt01201.wav にまとめられているので、引用例にはこのファイル冒頭からの経過時間で発話開始時を示す。

資料 C 三遊亭歌之介「酔っ払い」CD C-02『爆笑 120 分 part2』収録³

古典落語『代わり目』を鹿児島方言に翻案した演目。現南大隅町出身の演者、三遊亭歌之介氏は筆者と同年齢であり、アッコ「おまえ」、カイ「から」などいくつか語彙的な違いはあるものの、筆者の母方言にもっとも近い変種であり、より広域化した現代の鹿児島方言の資料とみてよいと考える。作中の登場人物は、酔っ払い、妻、俵屋の 3 人で、酔っ払いが平体の鹿児島方言、俵屋が共通語化した鹿児島方言、妻が相手により両方を使い分け、というような使い分けが原則である。他の資料と異なる点は、独白を含む点である。また、「演じられる作品」という性質上、expressive な表現が多用される。ただし、この点に関しては資料 B の「場面設定」の一部もよく似た特徴をもっている。B の場面のひとつは、この演目とよく似た設定で行われている。

引用例には、発話開始時をこの演目冒頭からの経過時間で示す。

1 母音助詞の語末母音融合形

共通語化した鹿児島方言では母音ではじまる格助詞エ「へ」やオ「を」は先行の名詞に融合して音節を再構成することはないが、本来の鹿児島方言ではこれらは先行名詞の音形に応じてさまざまな異形態をとる。格助詞イ「に/へ」については、上野(1992: 110f.)に詳細な記述がある。この場合の異形態は、単母音 i、二重母音第 2 要素イと長母音 ii、語末 a/o と融合した e、撥音に続く ni である。

格助詞オ「を」の場合は、単母音 o~u、語末母音と融合した長母音 oo、撥音に続く no であり、副助詞ア「は」の場合は、単母音(j)a、語末母音と融合した長母音 aa、撥音に続くときと、他の助詞に接続するときは na である。na は、助詞 i に接続する場合に n が口蓋化した異形態ももつ。

- | | | | |
|-----------------|--------|------------|------------|
| (11) a. アッ[マク]] | Ap445 | < [アッ]マツ]] | 「灰汁まき(A)を」 |
| b. カツツケ[オ] | B 4:52 | < カツツ[ケ] | 「かきつけ(B)を」 |

³ 2006 年以降、三遊亭歌之介師匠の許諾を得て以下でストリーミング音声と転写を公開している。形式が古い、2018 年 3 月現在、IE のプラグインでのみ再生可能である。
http://lg.let.kumamoto-u.ac.jp/prosody/yopparai.html

- | | | | |
|------------------|---------|--------------------|--------------|
| c. ナン[コー]] | B 51:35 | < [ナン]コ]] | 「なんこ(遊び A)を」 |
| d. トコロテン[ノ] | Ap449 | < トコロ[テン] | 「ところてん(B)を」 |
| (12) a. アン[ト]カ]] | B 36:33 | < [アン]トッ]] B 40:21 | 「あのとき(A)は」 |
| b. コガ[レ]ア]] | B 46:40 | < コ[ガ]レ]] | 「おこげ(A)は」 |
| c. カボ[チャー]] | B 46:31 | < カ[ボ]チャ]] | 「かぼちゃ(A)は」 |
| d. ヒ[ター]] | B 36:15 | < ヒ]ト]] | 「人(A)は」 |
| e. ゼン[ナ] | B 52:37 | < [ゼン] | 「金(B)は」 |
| f. オトーサント[ナ] | Ap441 | | 「おとうさん(B)とは」 |

格助詞イと比べて、(11)b や(12)b のような単母音音節となる場合が多い。格助詞イでは、名詞単独のときに i が「拍」を成さない二重母音に接続した場合のみがこの単母音 i となり、それ以外では先行音節に編入される。

- | | | | |
|---------------------|-----------|----------------|-------------|
| (13) a. チューガッジ[ダイ]] | B 2:00 | < チューガッ[ジ]ダイ]] | 「中学時代(A)に」 |
| b. ゴンダラ[[ケイ] B 2:59 | < ゴンダラ[ケ] | | 「ごみだらけ(B)に」 |
| c. オタフ[キ] B 42:41 | < オタ[フツ] | | 「おたふく(B)に」 |

このうち、2「拍」音節の疑いがあるのは(11)c と(12)c-d の融合長母音の場合であるが、この場合も音韻論的には単母音であり長母音化は音声的変異とする解釈も可能である。また、(12)d は(12)a の変種であり、先行のヒが無声で実現できない H が第2音節に送り込まれているともみることができる。句頭文節以外の位置では(12)a のピッチ形が出ている。

- | | | | |
|-----------------|---------|--|------------|
| (14) オヤ[ス]ヒ]タ]] | B 35:14 | | 「生やす人(A)は」 |
|-----------------|---------|--|------------|

しかし、興味深いのは名詞が語末長母音をもつ場合のピッチ形で、この場合には助詞はこの長母音音節に編入され二重母音となるが、名詞が A 型の場合は(11)c と同様の、2「拍」音節的な音形となる。

- | | | | |
|---------------------|----------------|--|-------|
| (15) a. ベン[キョ(一)オ]] | B 20:20, 29:00 | | 「勉強を」 |
| b. ベン[キョ(一)ア]] | B 20:44 | | 「勉強は」 |
| c. [ベン]キョ(一)ン]] | B 20:48 | | 「勉強の」 |

(15)ではいずれもキョーの母音は短い。(15)a の2例はいずれも動詞「する」が接続しており、語釈は格助詞を伴わない「勉強」となっているが、「勉強する」であれば、このピッチ形にはならないので、格助詞を伴っていると考えなければならない。

- | | | | |
|---------------------|--|--|--------|
| (16) [ベン]キョー]]シ]テ]] | | | 「勉強して」 |
|---------------------|--|--|--------|

つまり、東京方言では第2音節の拍数の違いにより弁別される「勉強をして」と「勉強して」が、鹿児島方言ではピッチ形での弁別となっているのである。筆者の内省では、同

様な関係が B 型の「騒動する」と「騒動をする」との間にも観察される。

- (17) a. ソ[ドー]スツ]] 「騒動する、騒ぐ」
b. ソ[[ド(一)オ]スツ]] 「騒動をする、騒ぐ」

(17)は内省形であるが、資料には2例がある。

- (18) a. ソ([ド]ー)[ヒン]ナツ]]コチャ]ナツ]ト]] B 37:09
「騒動、なってしまうことはなるんだ」
b. ソ[ド(一)イ] ナイ[ロ]チ]]ヨ]] B 37:17 「騒動になるだろうって」

(18)b では長母音は短く、第2音節が二重母音化しており、上野(1992: 111)のガツ[コイ]「学校に」と同じ型である。長母音で終わる A 型の名詞へのイの接続例としては、チッコー「築港」がある。

- (19) a. チッ[コ(一)イ]] B 50:50, 50:52 「築港に」
b. チッ[コー]モ]] B 50:56 「築港も」

(19a)は二重母音したコーイが2「拍」のピッチ形で出現している。(19b)では長い。B 型名詞ではゴッソー「御馳走」も頻出語彙である。

- (20) a. イッ[バン]ヨカ]ゴッソ(一)オ] B 35:59 「いちばんいいごちそうを」
b. ゴッ[[ソ(一)ア]ゴアハン[ドン] ナ]] B 40:36 「ごちそうはございませんがね」
c. ゴッ[[ソ(一)イ]ナツ[タ]ト]ジャ]] [ネ]ト]]ヤッ]] [[ド B 53:02
「ごちそうになったのではないんだぞ」
d. [[ナイ]ゴッソー]シ]ヤヒ]] カ]] B 35:47 「何をごちそうなさいますか」
e. ナイ[ノ]ゴッソー]ゴアンソ] カイ]] B 45:06 「何のごちそうでしょうか」

(20)a-c はソーは短く、助詞の接続しない d-e では長い。句頭位置にある(20)b と(20)c では、末音節は二重母音音節となり音節全体で H を実現するが、全体として上昇調となる。

(15)~(20)の長母音で終わる名詞への母音助詞の接続例は、いずれも、音量の点での鹿児島方言の特徴をよく示している。「拍の等時性」を借用していない本来の鹿児島方言の音量弁別は、長短の2項対立であって、2モーラ音節と3モーラ音節を音量によって区別することはできない。しかし、2モーラ音節と3モーラ音節の弁別は、2「拍」化という3モーラ音節特有のアクセント実現形によって維持されている、というようにも見るのであり得るのである。

残る問題は、(11)c や(12)c のような、2モーラ音節が3モーラ音節的なピッチ実現をもつ場合である。資料から他の例を追加する。

- (21) a. アラ[ター]] Ap443 「荒田(地名 A)は」

b. フクオ[[カー] B 33:44 「福岡(地名 B)は」

c. ハンハ[[コー] Ap461 「半箱(B)を」

2 モーラ長母音音節は、「拍」に関しては短母音と同じく 1 拍であるので、これらの語形がア[ラ]ター]]やフクオ[カー]となることが期待されるのであるが、そうになっていない、ということは、句末位置での短母音の長い実現ではなく何らかの縮約によって生じたということを示す機能をもっていると考えられる。あるいは、もう一つの可能性として助詞の異形態が短母音ではなく実は長母音であり、これらの語末音節も実は 3 モーラである、という解釈もありうるだろう。

注意が必要なのは、これらの例は単に形態素間の音節境界が実現していない、というだけでなく、音節境界が削除されて長母音音節に再編されている、ということである。長母音音節は鹿児島方言では短母音音節と同程度に短い実現形をもつ。このような短い実現形の例も資料には出る。この場合も無助詞との弁別は維持されるように思われる。

(22) シ[[オ(一)[ヨ]ケ(一)]]オイレヤシ]タ B 47:58 「塩(B)を多くお入れになりました」

2 子音脱落による融合形

鹿児島方言で母音間の r は脱落しやすい。ただし、環境によって脱落のしやすさは異なり、Vri の連続ではほぼ規則的に r が落ちて二重母音化あるいは長母音化が生じるのに対し、他の連続では個人差が生じやすい。たとえば、(23)では二人の話者が r の脱落のない語形とある語形で応答している。

(23) a. アレ⁴[ワ] ナ]] Ap446 「あれ(混ぜもの)はどうですか」

b. ア[エ]チャー]] ア]ノ]] キ[ナ]コ]] ナ]] Ap446 「あれってあの きなこですか」

格助詞の「から」もカラとカーの 2 つの語形があり、話者によって、あるいは同じ話者でも場面によって、どちらを用いているかが異なっている。しかし、カーを用いる場合でもアクセントは 2 「拍」音節化した実現形で現れる。

(24) a. コンマエ[カー]] B 38:24 「このまえ(A)から」 cf. コンマエ[カ]ラ]]

b. イマ[[カー] B 37:13 「今(B)から」 cf. イマカ[ラ]

c. アヒコ[[カー]モ]] ココカー[モ] B 38:06 「あそこ(A)からも ここ(B)からも」

このピッチ形は、本来 2 「拍」である r の脱落しない語形とよく似ており、単に音節境界が発現していないだけであるようにも見える。しかし、前節の終わりに述べた形態素境界がある場合と同様に、この場合も長母音として短い実現形をもつ。

⁴ 筆者未詳の語。「和え(B)」の hypercorrection の可能性もあるか。

(25) a. マッ[カ(一)][トッ]クン]モン]ジャンデ] Ap451

「町(A)から取って(買って)くるものですから」

b. サッ[カ(一)] イッカッ[シャ]グッ]ト]] ヤッ[ドン] B 39:14

「さっき(A)から教えてあげるのだけど」

(25)a は、原本では「マッカッ」と転写されており、カーは短い。鹿児島方言では促音に終わる閉音節でも下降調と平調が弁別的であり、たとえば、(25)a の[トッ]を[コッ]に置き換えると「買って来る」になる。(25)b では、カーの下降は続く次文節頭への下降と区別がつかず、B 型のように聞こえる音形となっている。

このような長母音の短い実現は、子音の脱落によって3モーラ音節が形成される場合に起きやすい。たとえば、尊敬語動詞を形成するヤッの否定形ヤラン～ヤレン「なさらない」がヤーンで発音される場合である。この場合も、ヤーンは2「拍」の音形で現れる。

(26) a. ダイ[モ][キ(一)⁵チャ]] オイ[ヤ(一)ン]] ガ]] B 7:15

「誰も聞いてはおられない(A)よ」

b. キッ[キャ(一)ン]]#[フ]]ジャ]#[ナー]] B 38:59 「聞かれない(A)ようだね」

c. ワカイヤ(一)ン[カ][ナー]] B 39:16 「おわかりにならない(B)かな」

(26)a と(26)b は A 型であり、3モーラ音節であることをアクセントのみで示している場合である。(26)c は B 型であるが、付属語のカが文節末となり、ヤーンは短い低平調となっている。B 型の例としては、助動詞として多用されるナラン「ならない」が短いナーンで出現している例が多い。資料 C もこの例では子音の脱落したナーンが出る。しかし、上昇調が出て2「拍」音節であることが確認できる句頭の例はなかった。なお、ヤラン、ナランは平体の語形であり、資料 A・B では敬体のヤ(ン)ハン、ナ(ン)ハンと競合するため、特定の話者・場面に出現が限定されている。

「から」と並んで r の脱落が頻出しているのが「なら」である。ソイ[ナー]]「それなら」のような頻出語形のほか、条件節マーカ―としての出現例がある。

(27) a. ハ[ヨ]ンマレタ[ナー]] B 12:44 「早く生まれたら(A)」

b. キーッオッタ[ナー]] B 39:19 「聞いていたら(A)」

c. オカエイ[ガ]アッタ[[ナー]] Ap454 「お帰りがあつたら(B)」

(27)a-b は A 型、c は B 型の文節の例であるが、いずれも2「拍」の音形となっている。ただし、このような節マーカ―としての出現例ではナーが短い例はない。環境によっては、

⁵ 無声化している。「来ちゃ(B)」との弁別は第2音節の下降調による。

本来短いナとの対立があることもその原因かもしれない。

- (28) a. [コッ]コン[[ナー]ワヤ B 4:35 「買って(A)こよう(おまえは)」
 b. ハ[ヨ]モドラ[ナ] B 39:35 「早く帰らない(B)と」
 c. ハ[ヨ]オキラン[ナ] B 24:16 「早く起きなさい(B)」

九州地方の談話資料にしばしば出る二人称代名詞の間投詞的使用のため紛らわしいが、(28)aの「買ってこないなら」は、話し手自身の状況を指示するモダリティー用法である。これに対して、(28)cは、「寝ている人を起こす」という場面設定の発話であり、聞き手の状況を指示している。(28)cでは、本来は(28)bと同様短いナが、発話末で高平調で延長されている。rが脱落しなければ[コッ]コンナ[ラという発話の短いナと対立が、(28)aでは2「拍」音節の上昇調によって維持されているため、この長母音音節は短縮されにくい。

2「拍」音節の例としてもっともよく取り上げられるのはサー「様」であり、この語も母音間のmの脱落と母音融合による長母音化の例と見ることができる。

- (29) a. オマン[[サー] <*オマンサ[マ] 「おまえさま(B)」
 b. ミンナ[サー]] Ap468, B 13:12 <*ミンナ[サ]マ 「みなさま(A)」

(29)aは、資料AとBでもっとも多用されている敬体の2人称代名詞である。使用例が多いだけに変異形も多い。長母音の音量は発話によってまちまちである。また、[[サーの上昇調の実現にも差がある。間投詞的に句末に挿入される場合は、低平に聞こえる語形が多い。(29)のような例は、名詞的用法であると考えられるので格助詞の接続する出現例を挙げる。

- (30) a. オサンニン[セー]モ]] B 15:38 「産婦さんへも」
 b. オサンニンサ[エ]モ]] B 15:51 「産婦さんへも」
(31) a. オマン[[セー] B 33:02 「あなたに」
 b. ミンナ[セ(一)]] Ap458,p471, B 25:40 「みなさんに」
 c. オミナ[セー]] B 15:59 「みなさんに」

(30)と(31)は、格助詞イの接続例である。(30)bはサマにiが接続した融合形サマの母音間mが脱落した語形と見られ、これがさらに融合して長母音化すると2「拍」音節として実現する。(31)bのp471の原文転写はミンナセであり、セーは短い、下降調が聞き取れA型のHLが2「拍」音節として実現している、長母音とみなさなければならぬ。他の格形の例を挙げる。

- (32) a. オマンサ(一)[オ] B 36:14, 37:26 「あなたを」
 b. オマンサ(一)[ア]ナ]] B 49:40 「あなたはね」

- (33) a. オマン[[サ(一)ン] B 39:18, 45:09 「あなたの」
 b. ダイツ[[サーン]...] B 18:04 「大中さま(松原神社)の・・・」

(32)では助詞オとアはいずれも単母音音節であり、「拍」を担っている。サーは短い。(33)aはサが短く、サーンが上昇調の2「拍」音節である。言い淀みのある(32)bでは、延長された母音部分が上昇調となっている。(15)～(20)との比較で通常の語末長母音とサーの比較が興味を惹く。特に、(32)bが助詞の接続しない2「拍」音節サーと弁別的であるとすれば、mの脱落による長母音が3モーラ音節として振舞っていると考えられる根拠となるが、この1例だけでそう判断することはできない。また、A型のサーにアやオが接続する出現例は資料にはない。

助詞イ接続形のセーは、九州他地域のサンともつながる、方向を示す助詞としての用法でも出現し、2「拍」音節の音調をもつ。この用法では短母音での出現例はない。

- (34) a. トーキョー[[セー] Ap451 「東京(B)に」
 b. ミ[[ナン]ノ]]ホーセー]] B 49:26 「南のほう(A)に」
 c. シタ[[セー]][[イ]タ]] B 49:56 「下(A)に行った」

さらに、上野(1992:107)で2「拍」音節に関連する問題で「既に知られている」ものとしてサーと共に挙げられている、動詞に接続するセーも、おそらく同じ助詞イ接続形に由来すると思われる。これは、動詞のどんな語形に接続するかに関して不安定なところが観察されるからである。原則は、動詞連用形に接続助詞テが接続した、いわゆるテ形の、末母音が脱落した形であり、先行母音があればテ/デは促音化して残り(ユックユテ「言って」、アスックアスデ「遊んで」、先行母音が無ければテ/デ全体が脱落する(トックトッテ「取って」、フンクフンデ「踏んで」)。しかし、資料中には音便のない動詞の連用形にセーが接続している語形も見受けられる。また、敬体にセーが接続している語形(ゴザッセー、～モッセー)も、テが脱落しない敬体テ形ではなく連用形(シ)の語末母音が脱落したとみられる。「すれ違いざまに」などの語形の存在を考慮すると、連用形接続の複合名詞の格助詞を伴う副詞的用法が文法化されたものと考えたほうがよいように思われる。

- (35) a. ツ[[クッ]チョイセー]][[ナー]] Ap462 「作っておいて(A)ねえ」
 b. アタイ[[セー]][[ナー]] Ap449 「あたって(A)ねえ」
 c. ツクイッセ], ツクイセー] Ap445 「作って(B)」
 (36) a. マゼモツ[[セー] Ap448 「混ぜまして(B)」
 b. [ソ]ゲン モツ[[セー]マカンソデ] Ap455 「そのように申して(B)おきますから」
 c. ゲン[[キ]ナ]][[コッ]ゴザッセー] Ap460 「元気なことでございまして(B)」

テ形接続への変化は、セー形がテ形句末用法と重なりをもつことに求められる。句末の弱い位置に置くには短すぎて冗長性が不足しているテ形を延長する語形としての意識が、テ形への接語化を促したと考えられる。このような、句末テ形の代用としての用法で、特に連文節の構造で H の上昇が抑制される環境では、セーの実現はしばしば短くなる。

(37) a. トー[キョー]イタッセ(ー)] B 20:18 「東京に行って(A)」

b. ダイコン[ノ]ハナガ[タイ]キッセ(ー)] Ap451 「大根を花型に切って(B)」

このような短縮がおきる場合は、2「拍」音節と通常の音節の対立はほぼ中和される。2「拍」とは、HL または LH の H が 1 音節内にあることをいうが、H が抑制されると、A 型では下降の開始位置、B 型では抑制された上昇の曲線だけが 2「拍」音節を特徴付けることになるが、この特徴の実現にはある程度の有声部の長さが必要だからである。

これに対して、上野(1992:107)で「母親が子どもに注意する時(中略)《(また...を)して!》」と記述している用法では、この H の抑制が起きない。むしろ、expressive な上昇幅の拡大があり、H に先行する L も低められる。このような表現ではセーの短縮は起きない。

(38) a. ヨカブッ[[セー] B 54:37 「えらぶって(B)」

b. シロンゲ#[タ]ドン]] フン#[セー]] B 54:47 「しゅろの下駄なんかはいて(A)」

(39) a. ソシ#[コ]ノン]ジョッセー]] B 8:03 「それだけ飲んでいて(A)」

b. #[バン]ナ]]イッズイ[ドン]オキッ]チョイセー]] B 16:59
「晩はいつまでも起きていて(A)」

(38)は「町」の住人が士族をどのように冷笑しているかを説明した部分で使われている expressive な表現で、セーのピッチ上昇幅が大きく、また(38)b では通常連文節構造を成す動詞が独立して句を構成して H の上昇をもつことも expressive な効果を高めている。(39)は句頭の H のみが上昇幅を上げている叱責の表現である。すべての文節の H にプロミネンスをおくと、よりきつい叱責となるが、(39)の両例では補助動詞部分のプロミネンスはない。

Expressive な表現としては、程度表現のワッゼー「すごい(A)」も、形容詞ワッザーレカ⁶から r が脱落して母音が融合したことによる 2「拍」音節をもつ。

(40) a. ワッ#[ゼー]]コッ]ジャッ]チ B 50:40 「大変なことだと」

b. ワッ[ゼ(ー)]ワ#[ケ]シ]ノ]] B 29:06 「とても若い人が」

c. ワッ[ゼ(ー)]シン#[ガ]ゴアン] [[ド B 48:26 「ひどく芯がありますよ」

⁶ 語源がワザワイラシカだとすればザーの長母音も子音脱落によるものである。鹿児島方言にはほかにグラシ「業らしい、かわいそうな」やオセラシカ「大人しい」がある。

ワッゼーにプロミネンスのある H が置かれている(39)a は、ゼーは長く、高い位置からの急な下降調となる。これに対し、(40)b と(40)c はむしろ後続文節により大きなプロミネンスがある場合で、ゼーへの上昇は大きいものの、非常に短いため、次の文節への大きな下降は B 型の語末下降と区別がつけにくいものとなっている。

資料中にワッゼーは 4 例しか出現例がないが、筆者の世代ではおそらくもっとも多用された程度表現で、(40)a と並んでゼーが通常の長母音と同じく 1 拍となる#[ワッ]ゼー] というピッチ形が併用された。

最後に、句の内部での子音の脱落と融合による 2「拍」の長母音の例を掲げる。資料 A と B では、ヤド「家」が「うち」を指す表現となり、このヤドが助詞ノを介さずに所有者名詞・代名詞に後続し、アクセントの単位としても統合した複合語として、「～のお宅/うち」を指す表現となっている。資料 C では、より広域的な、助詞ガとエ「家」の融合形ゲーが同様な複合語を構成する。このヤドの語頭子音が脱落して、前分の末母音と融合した語形が資料 B に多く出現する。

- | | | | |
|---------|----------------------|--------------|------------------|
| (41) a. | ワイガー[ドン]オカタモ] | B 9:36 | 「おまえ(B)のところの女房も」 |
| | b. オイ[[ガー]ドン]] | B 9:40, 9:48 | 「俺(A)のところの」 |
| | c. ワガー[ドン][エ]ノ]]マ[エ] | B 51:16 | 「自分(B)の家の前に」 |
| | d. オマンサー[ドン] オッサン[ガ] | B 35:07 | 「お宅(B)の奥さんが」 |
| (42) a. | アタイ[ガー]ダ]] | B 13:18 | 「私(A)のうちは」 |
| | b. オマンサー[ダ] | B 24:49 | 「お宅(B)は」 |

出現例ではすべてガーは長い。興味深いのは(41)b の 2 例では 2「拍」の実現が、A 型次末音節であり、B 型末音節のような上昇調になっている、という点である。脱落がない場合のオイガ[ヤ]ドンのピッチ形をそのまま引き続けているように見える。しかし、(42)a は同じ A 型次末音節が高平調の 1「拍」で実現している。

以上、鹿児島方言では子音脱落と母音融合によって生じた長母音音節 CV(C)V が、通常の 2 モーラ長母音音節 CVV と異なり、3 モーラ音節 CVVC と同じくアクセント上 2「拍」として振舞うことをまとめた。分析の可能性としては、CV(C)V を仮想的な音節末子音をもつ CVVX とする方向も考えられるが、本稿ではそのような分析は試みない。むしろ注目するのは、CV(C)V, CV(V)V と CVVC が、アクセントに関しては、環境に応じてではあるが、2 音節連続の CVCV と同じ単位(2「拍」)とみなしうるのに対し、通常の 2 モーラ音節である CVC や CVV が、常に CVCV より小さな単位になっている、という点である。まず検討を要するのは、これが何を意味するかではないかと考える。

3 終助詞ワの融合形

鹿児島方言の終助詞はほとんどがアクセント上独立しているが、この節でとりあげる終助詞は先行の用言とアクセント上融合し、形態論的にも動詞の活用形のようにみえる共時的には不透明な接続関係をもっている。これを終助詞と呼んだのは通時的な観点であり、他方言のワや、あるいは北西九州方言のバイとも共通する用法をもっているからである。たとえば、やや古めかしい東日本方言の終助詞ワ融合形とも以下のような点で比較可能な共通点をもっている。

- (43) a. 動詞終止形 u と融合して aa。ア]ラア<ア]ルワ、イラ]ア<イル]ワ
b. 形容詞など i で終わる終止形と融合して ja。イネエ]ヤ<イナイ]ヤ<イナイ]ワ
c. デス、マスとも融合して aa。ソ]ーデ]サア、アリマ]サア
d. タ/ダで終わる助動詞に接続するときは融合しない。
e. さらに他の終助詞が後続しうる。

鹿児島方言には以下のような性質をもつ融合形がある。

- (44) a. 動詞終止形は通常末母音が脱落し促音化あるいは撥音化するが、基底形の子音と融合して長母音 aa
b. 形容詞終止形イ語尾に融合して jaa。
c. 敬体動詞には ns-語尾（未然形-nso と共通）に融合して aa
d. 形容詞終止形カ語尾や、平体・敬体共通のタ/ダで終わる助動詞や形容詞終止形カ語尾に融合するときは aa、平体・敬体共通の否定形ンに融合するときは naa
e. 敬体は他の終助詞が後続しうる。平体は必ず後続の終助詞ヨまたはイが接続しなければならず、後者には他の終助詞が後続しうる。

(43)では、終助詞が融合する場合も長母音化によって拍数は変わらない。(44)でも、長母音形で融合する場合には、2「拍」の音節として実現する。母音が短い場合は長母音の短い実現形とみることができる。つまり、第1節で記述した助詞の融合形の1種とみることができるだろう。ただし、これらの形態は常に融合形で現れ、単母音助詞としての出現がない。従って、共時的に融合形と考える根拠はない。また、どんな場合に短い形態が現れるかについては検討が必要である。

この語形を特徴付けるのは、(44)e である。平体に常に接続するヨと、おそらくその短縮形態であるイは、(3)c の終助詞ヨと同じものであり、H からの下降幅の拡大を要求する。このため、平体でのこの語形の使用は、驚き・苛立ち・詠嘆といった何らかの expressive な意味に結び付けられる。このため、この語形は独白においても使用されやすい。資料 C

の独白の部分ではこの語形が頻出する。

敬体と平体に分けて資料での出現例を示す。後続の助詞のない発話は、敬体のみで可能である。この場合は aa は常に長い。

- (45) a. ム[カ]シ][ユー]チョイヤンサー]] B 30:28 「昔言っておられ(A)ますよ」
b. マ[チット][サッ]ゴアンサー]] B 49:39 「もう少し先です(B)よ」
c. メンド[セ⁷]シモサー]] Ap451 「めんどくさがりますね=する(A)」

敬体の場合は、連文節構造で H が抑制される位置に現れる場合が多い。このため、2「拍」になっている判断は(45)a,c のような A 型で下降開始が音節内である、という点のみに拠っている。

後続する助詞としては、敬体のナーとオの例が出ている。いずれも文末だけでなく句末にも出現する助詞である。

- (46) a. エバザ[コ]ワ オイシューゴアン[[サー] [[ナー]]Ap443
「えばざこはおいしゅうございます(B)よねえ」
b. カ[ワイー]]モン]ゴアン[[サー] [[ナー]] B 13:48
「かわいいものです(B)よねえ」

- (47) a. イッ[デン]ネテ#[カ]ラ]]オケランサー] オ]] B 3:57
「いつでも寝てから帰る(B)でしょう」
b. シランヒ#[ター]]オハン]ナ(一)] オ]] B 36:15 「知らない人はいない(A)でしょう」
c. アメ[ド]マ]] [ネン]ジュー]]ゴアン[[サ(一)] [[オ]] B 4:27
「飴なんか年中ある(B)でしょう」

助詞が接続すると、(47)b や c のように aa が短縮される場合もある。平体での expressive な aa の用法に対応するとみられる用法は、(47)のようにオが接続する場合である。(47)a と b では句頭側の H の上昇幅が拡大されているが、動詞側は連文節構造で H が抑制されている。女性が多用するオはさまざまなイントネーションと共に現れて expressive なニュアンスを表わすことがあるが、上昇下降調で母音が延長されている(47)c は聞き手に再考を促すニュアンスとなっている。

(46)と(47)は B 型文節の場合であるが、A 型文節の出現例ではすべて aa が短縮されており、かつ 2「拍」を構成していないとみなすべきである例もある。

- (48) a. [ルッ]]ジャチ]ユモン]サ(一)] [[オ]] B 33:09 「留守だといいますよね」

⁷ 筆者未詳の「セ」。「セー」の短縮形の可能性もある。

b. ゴーヒト[チャー]カエ#[モ]サ(一)] オ]] B 53:27 「合一つ(2.5 合)は買えるでしょう」

c. ミ[トン]#[ノー]キコエモン]サ(一)] オ]] B 54:04 「みっともなく聞こえるでしょう」

(48)b では、H が先行音節にあり、モサーが CVCV の下降[CV]CV]]のように聞こえる。H が抑制されている(48)a と c でも、下降開始は音節境界からであり、積極的に2「拍」化を認める根拠はない。このような、A 型の1「拍」実現、B 型の2「拍」化の傾向は、常に後続の助詞を伴う平体の aa ではいっそう顕著である。

平体で aa に接続する終助詞ヨは、常に低い下降調となり、句頭文節の H の上昇の幅が大きいことと併せて、発話に大きなピッチ下降を実現する。この句頭文節が発話末の文節である場合、つまり H の上昇がある場合の次末音節以降のピッチ形は、(49)のようにまとめられる。長母音 aa の短縮をイタリック体 *a* で表記する。

(49) A 型 #[CV]Caa]]ヨ]]~#[CV]Ca]]ヨ]], ? CV#[Caa]]ヨ]]

B 型 CV[[#Caa]]ヨ]]~CV#[Ca]]ヨ]]

A 型では、長母音が短縮しない場合でも1「拍」扱いのピッチ形のみが出現する。筆者の内省では、聞き手に反駁したり文句をいったりするときのような非常に expressive な表現では2「拍」化して発話末側で一気に下降する発話も可能であるが、資料では確かめられない。B 型では長母音が短縮しない場合には2「拍」化した上昇調となり、短縮した場合には、1「拍」音節に expressive な上昇調が加わっているとも解釈可能な、「拍」数の対立が中和した音形となる。

資料では aa が短縮した実現形のほうが多く、*a* を認める分析もありうるが、それでも aa を基本と考えるのは、aa が短縮できない場合があるからである。(44)d の、タ形や形容詞カ語尾への融合は、aa が短縮した場合に(15)/(16)や(17)のようなピッチによる融合の有無の弁別ができないとみられ、資料でも短縮しない発話のみが聞かれる。

(50) a. マッゴ[[#ター] ヨ]] C 2:14 「(見)まちがえた(B)よ」

b. ソ[ゲ]ナ]]コ[ツ] イワレ[ル]ト]] ヨワ[[#ヤー] ヨ]] C 4:51

「そんなことを言われると弱え(B)や」

c. #[マッ]コ]]シ]]⁸チャー]]ヨ]] オマンサー[モ]C 2:33

「真っ赤にしてらあ(A)、おまえさんも」

d. ホシ#[ガッ]チョッ]ター]]ヨ]] [ネ]] C 1:38 「(そういや)ほしがってた(A)よなあ」

(51) a. ヨクレ#[ボ] ヤ#[ラ(一)]ヨ]] C 11:49 「よっばらいじゃ(B)ないか」

⁸ 単音節 A 型のシは無声化せずやや長い。

b. ア#[ルイ]#[チョ]ラ(一)ヨ]] C 12:19 「歩いてらあ(A)な」

(51)は、通常のイントネーションでは H が抑制される自立する付属語に大きな上昇をおくことによって expressive な効果を出している発話の例である。

一方、終助詞ヨの縮約形とみられるイは、B 型では aa と融合してアクセント実現単位の境界をまたぐ 2「拍」音節を形成する。2「拍」のうち B 型語末の H に続く「拍」はヨの持っていた下降を引き継ぐとみられる L で、その結果 B 型も A 型と同じく下降調をとる。型の弁別は、A 型が必ず次末音節に H「拍」をもつように aa とイの融合音節が 1「拍」音節のピッチ形を取ることで維持される。末音節の 2 種類の下降のみによる弁別ができないことは、鹿児島方言の音節が担うことのできる「拍」が 2 個までであることを示している。

(52) A 型 [CV]Caaj]]~[CV]Caj]], *CV[Caaj]]

B 型 CV[Caaj]]~CV[Caj]], *CV[[Caaj]]

(53) a. [トッ]ジャッ[デ] オボエン#[ナーイ]]ソ]ラ]] B 4:10

「齢だから覚えてねえ(B)やそれ」

b. カツケ#[オ]ワスレ]ターイ]] B 4:51 「書付を忘れた(A)よ」

c. ノマ[スッ⁹]ト#[コイ]ガ]] マ]タ]] エ[ヤ(一)イ]]チ B9:35

「飲ませるところがまたいい(B)やって」

d. #[ソ]ゲン]] ワイ[ガ]ユ-[ゴ]チャ]]イ[カン]ナ(一)イ]] B 3:35

「そうおまえが言うようにはいかねえ(A)や」

(54) a. [アン]ネ]]#[クイ]マ]] ヤ##[ラ(一)イ]]#[ソ]ヤ]] C 3:48 「危ない車だ(B)そりゃ」

b. ダイ[モ]#[ミ]チョ#[ラン]ナ(一)イ]] C 1:41 「誰も見ていねえ(A)や」

B 型が下降調を取ることは、終助詞なしに文末イントネーションが直接加わった B 型の語末音節が下降調になるのとも似ているが、違いは、aa の融合形では終助詞のセグメント(j)が残る点と、さらに助詞が後続してもこの下降調が維持される点である。これは、この下降調が文末イントネーションではないことを示している。後続する助詞は、上昇下降調の[[ネ]]¹⁰と、低い下降調のサ]]の 2 つで、いずれもイントネーションとの組合せで expressive な機能を担うことがある。[[ネ]]は、この文末終助詞の上昇が H のピークとなるように先行部分の H を抑制した(53)a のような「しみじみ調」イントネーションとの組合せで詠嘆を表わす用法が資料 C に頻出する。一方、サ]]は句頭文節の H の上昇幅を大きくすること

⁹ 音節全体が無声化している。

¹⁰ 資料 B では敬体の[[ナ]]も併用。独白では[[ネ]]。

で、聞き手への反駁の意図を表わすが、資料では確認されない。

助詞[[ネ]]が接続する場合、A型ではaaが短縮されて1「拍」となるのに対し、B型ではaaが長く2「拍」の上昇調音節となり、イを単母音音節とするピッチ形が可能である。

(55) A型 [CV]Caj]] [[ネ]] ?*CV[Caa]イ]] [[ネ]] cf. ?CV#[Caa]イ]] サ]]

B型 CV[Caj]] [[ネ]]~CV[[Caa]イ]] [[ネ]]

(56) a. ヤッ[パイ]ショー#[チュー]ジャラ(一)イ]] ([[ネ]] B 9:26 「やっぱり焼酎(B)だな」

b. カマボ#[コ]ガ]]アッタ(一)イ]] [[ネ]] C 19:22 「かまぼこ(A)があった(B)だろう」

c. カタイニ#[キ]ヤ(一)イ]] [[ネ]] B 7:29 「話しにくい(A)やな」

d. [ジョーッ]ジャ#[ラ(一)イ]] ##[[ネ]] C 15:42 「上手(B)だよねえ」

(57) a. [ソイ]モ]]ヨ[[カー]イ]] ##[[ネ]] C 14:28 「それもいい(B)ね」

b. ヨ[[カー]イ]] ##[[ネ]] ウ[チ]ニ]]オ#[レ]ル]]ヒ##[ト]ワ]] C 19:42

「いい(B)よね うちにいられる人は」

筆者の内省では、このような音節再編はサ]]の接続時にも可能で、さらにこの場合はA型でもaaの下降調の2「拍」音節化したピッチ形が1「拍」音節のそれよりさらに expressive な表現として可能である。

本稿で取り上げた長母音の短縮の有無は、まだ未解明な部分も多いが、鹿児島方言の長母音の長さの実現がイントネーションの要求する曲調と深い関わりをもっていることを示唆している。鹿児島方言では、音韻論上の長母音とは、イントネーション上あるいはアクセント上の必要があれば曲調でも音量を伸ばすことができ、短母音のように脱落することがない母音である、と考える。

参考文献

上野善道(1992)「鹿児島県吹上町方言の複合名詞のアクセント」『日本語イントネーションの実態と分析』重点領域研究「日本語音声」C3 班平成3年度研究成果報告書:91-208.